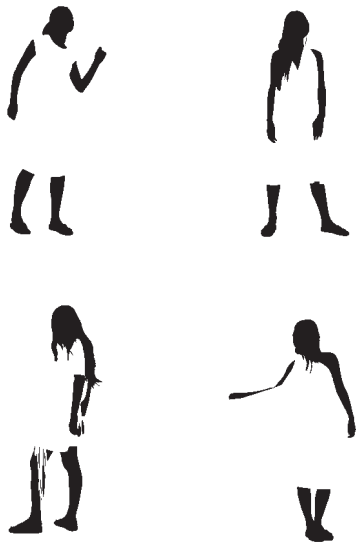


エドウィナ ホール(ファッションデザイナー)が主催「裸の王さま」イベントは9月20日から25日までオーストリア大使館のサポートのもと愛知万博内、オーストリアパビリオンで行われる。
また9月20、21日には名古屋シティーアートミュージアム、デザインセンター、トヨタ 自動車博物館、名古屋駅、新幹線などの各所に彼女の意する「トイレットペーパー」が特別に設置される。

エドウィナ ホール プロフィール
オーストリア ザルツブルグ生まれ。
1991-93 Yohji Yamamoto(東京)にて、アシスタントを経験。
1996 エドウィナ ホールのコレクションをオーストリア ウィーンにて開始。
2000 東京へ本拠地を移す。
毎回テーマを設け、2005S/Sコレクションは「裸の王さま」を題材にした。



『カミの国、日本そして、トイレット・ロールペーパー』

1.『カミの国』;

かつての日本は『カミの国』であった。美しい水ときれいな空気が豊富な日本の各地で僕たちの幾代か前の祖先が、自然との対話と融合と調和の証として当たり前の労働として、多くの美しい『カミ』を梳き、大切に使う自分たちの営みの環境と風景を作ってきた。そして、結果この国の『文化』までを創った。『カミ』が各地で豊富に生産されたために書、画が建造物が、市井の人たちが営む家をもこの僕たちの国の文化として育まれた。そんなこの『カミの国』も1945年8月15日を契機に『カミくずの国』と化してしまった。大切に几帳面に使われていた『カミ』は輸入、再生紙に取って代わられ街頭の人ゴミの至る所でタダ(無料)で配られるまでの完全『消耗品』となった。気が付いてみると、僕たちの国そのものが『大衆消費経済社会』という自由、平等、豊かさの『消費国』の誕生だった。そんなこの国の主役たちは『豊かになる難民』として世界をさ迷い始めた。

2.『トイレット・ロールペーパー』;

僅か、40年前まではトイレットロールペーパーは贅沢品だった。それ以上に珍しい舶来商品の一つだった。'64年の東京オリンピック、'70年の大阪万博。これらの二大世界規模のイベントは僕たちの日常生活での風景と環境を舶来化し、アメリカナイズし始めた。これ以降、日本は水洗式トイレ化へと進展し、トイレット・ロールペーパーは新たな、戦後の国民的生活必需品となる。いつの間にかマイホームにはなくてはならない我が家の主役となったのだ。忘れてはならない、'74年の石油オイルショック時。私たちのお母さんたちは行列を作ってまでして何を買ったかというトイレット・ロールペーパーだったのだ。丁度、このトイレット・ロールペーパーと時期を同じに、単にモノというだけでなくイメージでも在るもの、単にラインナップというだけでなく感覚的であるものがこの時代から新たな世界文化の商品となる。文化が日用品レベルの問題に成り下がり、身なりが人の判断基準となり、見てくれがイデオロギーと化しはじめる。そして、現代では全てがイメージであり、ファジー。そして、それらは全て『消費財』全てが消費され、消費するものというリアリティ。

これらのパラドックスな関係の成立した社会が現代消費社会。

『カミの国』のトイレット・ロールペーパーは

では、イメージ商品になりえるのか? ファジーな消費財なのか?
ただ、『消費』するというリアリティをもて遊んでみたくありませんか?

TEXT:平川武治/モード・クリニシエ/www.discipline-jap.be.lepli

裸の王さま

The Emperor's
New Clothes
A project by
Edwina Hörl

www.edwinahoerl.com

Edwina Hörl

裸の王さま

エドウィナ ホールのコレクション

エドウィナ ホールの「裸の王様」コレクションの作品では形も色も後退して服を着ている人はまるで裸のように見える。白、薄いグレー、肌色の布が単純なカットで、まるで「見えない」糸で縫ったようにして体にまとわりつく。長く引き延ばしたシャツ、腰の回りや背中にずり落ちてくるシャツが服である。頭や身体を大きなテントのように包み込む白いジャケット、身体のまん中にたっぷり余裕をのこしたオーバーオール。首に巻かれた肌色の縄と生きるのに必要なものだけを詰め込んだ、また放浪の旅のための大きな大きな袋。人がいつも着ている服なのにこんな風には着たことがない。童話の「裸の王様」の王のようにその服を着る人は楽に動いているのに、見る者たちは自信がない:この人は服を着ているのだろうか?私が見ているのは服?それとも服を見たことがあるからそうだと思っている物だろうか?見方の問題?触ってみれば服なのか?これは一体なんだろう。服それとも裸?服ならどんな服なのだろう?

anna schober

エドウィナホールプロジェクト:

エドウィナホールは彼女のコレクション「裸の王様」のデザインをトイレットペーパーにプリントした。アンデルセンの童話をデザインソースにして、彼女の服は洋服ではなく、モデルの身体の空白部分をかかってイマジネーションさせる。そこに無いもの、実在の欠除というか、実在しているように見せかけることとの遊戯を通してイメージ、アイデンティティを示すものであるはずの服が持つファンタスマ(まぼろし)的な側面があらわにされる。物の本質を頭の中でかみ砕くことでほんの一瞬だがアイデンティティを支えているブランド シンボルが消失する。なかなか手ごとどかない欲望の対象とされた服が持つ特別なステータスはこうして保証されると同時に否定される。贅沢品としてのモードがもつファンタスマ的な側面と実用品がもつ現実的な側面との間の距離をエドウィナホールは彼女の「無」の服を着る側としてトイレットペーパーに託し、反映させる。排泄の場所であるトイレは文化の産物の解体過程を表示する場所に様変わりする一少なくともこの1日の間。

文:ザビーネ ヴィンクラ